

父親を待たせている

ルカによる福音書に記される放蕩息子の譬え話は、聖書の中でもっとも有名な譬え話でしょう。多くの芸術家にインスピレーションを与え、さまざまな作品が生み出されてきました。わたしもそうした作品のいくつかに親しんだことがあります。どうして、この譬え話がそれほど人を引きつけるのか、有名な話だけに下手な説き明かしなどせず、ゆっくり二度ほど朗読して今朝は終わりにしたいと思ったりもします。これから示されたことをご一緒に分かち合うわけですが、わたしとしては「父親を待たせている」という説教題で語りたいことを言い尽くしたようにも思います。今日は、そのことだけを持ち帰って、みずからを顧みてくださればよい、そんな気がします。

見失った羊、なくした銀貨、そして放蕩息子、ルカによる福音書15章に記される有名な譬え話は重ね合わされて、失われた者が見いだされたときの喜びを証言します。いまのわたしたちの社会は自己実現という言葉を与え、その実、スタート地点は平等でなく、親ガチャなどという言葉が流行語となるような社会で、そこでは失敗すれば自己責任という言葉で引導が渡され、切り捨てられる。紋切り型なまとめですが、格差社会のなかで、底辺に追いやられた者がすくい上げられた時、その者に、どんな声がかかけられ、どんな視線が向けられるのか、それは聖書の時代も変わらなかったようです。神の子、イエス・キリストがそうした者たちのところに真っ先に向かわれ、食事を共にされたということをどのように受け止めるのか。少なくとも当時の社会の上澄みの人たちは好意的に受け止めなかった。あの人には罪深い人の家の客となったとか、罪人と一緒に食事までしていると眉をひそめた。イエスさまの態度は痛烈です。あなたたちは喜ばない。しかし、これらの人が救われることは天に大きな喜びがある。天の父が、その人の救いを喜ぶ。それは死んで

いた者が生き返ったと貴重な家畜を屠ってみなで宴会を始めるほどの喜びなのだ。あなたがたのはかる秤と天の父の秤は違うのだと、神の国の喜びが、失われた者が見いだされ、名誉回復され、あるべき存在として連れ戻され、新しく生き始める喜びであることに目を向けるように示されるのです。

まずこの譬え話においてふれなければならないのは何でしょう。ふたりの息子をもつ父親がいて、若い方の息子が家を出たいがために生前贈与を父に求めます。「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」とストレートです。親のすねをかじるということはありますが、本来なら親が死んでから相続する分を、つまり親の管理下にあるものを生きているうちから自由にさせてくれということは普通ないですね。これは血縁の共同体が親族レベルで寄り添って大集団を作って、初めて一族の生存が保たれていた古代社会ではほとんど考えられない暴挙です。たんに家出というのではなく、共同体のかたちを崩してまで財産をもらって、これは土地や家畜が考えられますが、それを数日のうちにカネに変えて遠い国へ行ったというのであれば、この弟は文字通り、彼の属する共同体全体に三行半を叩きつけたに等しいのです。父親の名誉も傷ついたのでしょう。

この息子は何がしたかったのか。衝動の赴くままに振る舞ったように「放蕩息子」と呼ばれるようにお金を無駄なことに溶かしてしまいます。なにもかも使い果たしてしまった頃に、その地方で飢饉があり、かばってくれるような共同体に属していなかった彼はその地方の有力者をたより、畑で豚を飼う仕事を得たといえます。羊飼いにせよ、豚飼いにせよ、何も財産をもたないから人の家畜をあずかって世話をするのです。しかもイスラエル人にとって豚は避ける動物でしたので彼にとっては生きるためとはいえ、意にそまぬ仕事だったことは間違いありません。ひもじさのあまり豚の食べるいなご

豆にまで手を出そうとして彼は我に返ります。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に有り余るほどのパンがあるのに、自分はここで餓死しそうだ。ここを立ち、父のところへ行っておもう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』」そう決心をした。ここで天に対しても罪を犯したという認識を彼が持ったことは大切です。これは「父母を敬え」という十戒の第5の戒めをまもらなかったと言ってもよいのですが、わたしたちの歩みが逸れるとき、それは必ず神さまがわたしたちを守ろうとして与えて下さった恵みの枠組みをさきに踏み越えていることを弁えたいと思います。こうして息子は自分の故郷に帰ってくるのですが、彼がまだ遠く離れているうちに父親は彼を認め、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した、とあります。感動的な光景に描かれることが多いですが、実際はそんな見目麗しいものではありません。これはこうしなければ息子の命が危なかったからです。共同体に損害を与えて去っていった息子は既に外部の人間であり、雇い人や、この共同体に属する者たちによって害される恐れが十分以上にあったため、父親は、息子を認めるやいなや駆け寄ったのです。この行為はかなり異例であることが指摘されています。走ろうとしたら裾の長い服を持ち上げてスネを見せて走らなければなりません。これは格好が悪く、家父長である者のすることではないのです。年長者は名誉を示さなければならない存在でした。しかし、そうした体裁よりもぼろぼろになって帰ってきた息子に対する憐れみがまさった。遠く離れているうちに父親は息子を認めて走っていきますが、どうでしょう。父親の目が良かったとして、教会玄関から雁宿公園の入り口までの直線距離くらい、約100メートルほどとして、これを全力で年老いた父親が駆ける。裾をからげてスネをむき出しにしてこけつまろびつ走る。息子に危害を加えさせまいと懸命に駆ける。憐れ

に思っという単語は、有名な「スプラクニゾマイ」です。「スプラ
ンコン」=内蔵を意味する名詞が動詞になった。内臓が揺さぶられ
る。腸(はらわた)が震えるような、腹の底からあふれる憐れみを示
したという言葉がここで用いられています。断腸の思いですね。こ
れは中国の故事ですが、齊の桓公の時代、揚子江中流域を船で
旅していた時、三峡という難所で家来が猿の子を捕まえたところ、
その母親が哀しそうに泣きながら船を百里も追いかけてきてつい
に舟に飛び乗ったがそこで息絶えた。その猿の腹を割いてみたところ、
腸がずたずたに干切れていたという。子を思う親の気持ちはこ
のようであるのでしょうか。断腸の愛、父のこの憐れみが息子の不義
を、罪を覆うのです。抱きしめ、接吻することでこの放蕩を尽くした
息子、共同体に損害を与え、自分の顔に泥を塗った子がなお自分
の庇護下に置かれることを身を持って示した。ここに背く者をも愛し
てやまない神の愛を見ることが出来ます。ご自身から低きに降り、
みずからを分かち与える姿です。その赦しの愛のもとで放蕩息子
は新しい存在へと変えられてゆきます。彼は用意してきた言葉を紡
ぎます。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても
罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』ここで
使われる資格という言葉が重いですね。この言葉にわたしたちは
縛られる。しかし、このなにか資格によって、お金を稼ぐことによ
って、美しさによって、善良さによって、地位によって、健康によっ
て、自分の持つ何かによって自分は立っている。愛されている。そう考
えるなら、それは幻想だと、間違いだと聖書は告げています。ただ
神の憐れみによってのみ、あなたは神様の御前に立つことが許され
る。そこが弟とこのあと弟が受け入れられたことに激怒する兄、
もうひとりの放蕩息子との違いを分けていくのです。父親は、おそ
らく、息子に皆まで言わせず、かぶせるように叫んだのではないか
と思うのですが、駆けつけてきた下僕たちにむかって、急いで一番

よい服を持ってきて、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物をはかせなさい。それから肥えた子牛を連れてきて屠りなさい。食べて祝おう」と、息子を守るために自分の息子であることを周囲に示すために本来、彼がいた息子の立場を示すあらゆる装身具を最優先で身につけさせます。そして宴会を始める。冷蔵庫などない時代ですから、子牛一頭屠ったら大宴会になります。使い切らなければなりませんから。おそらく共同体全員を巻き込んだ祝会が開かれたでしょう。そして、まとめの言葉が来ます。「この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」、ここに父の御心があります。わたしたちを探し求め、立ち返りを腹の底から待ち望み、喜ばれる父なる神の姿がある。今回、この物語を読み直して、ゲラサで悪霊に取り憑かれていた男、レギオンに悩まされ墓場を住処にしていた男が正気に戻るのに、豚2千頭あまりが崖から湖へ雪崩うって溺れ死んだという出来事を思い出しました。一人の男が共同体に復帰するために豚2千頭の犠牲が必要でした。しかし、その地方の人々はその出来事を見て、喜ぶのではなく、イエス様に出て行ってくれと頼むのです。放蕩息子が我に返って真実に父の子となるのに、共同体に損害を与えるほどの財産と、時間と、身につまされる経験が必要だった。それは真面目な兄を怒らせます。しかし、父は喜ぶ。大いに喜ぶ。死んでいたのに生き返ったとまで言う。神に対して死んでいた息子を、わたしどもを生かすために独り子イエス・キリストをささげられた父なる神の断腸の愛の言葉です。この言葉の前にわたしたちは立たせられるのです。わたしたちは父親を待たせている。

お祈りいたします。